

- 渡瀬博士とマンガース 東京毎夕新聞 7月15日
- 1923:
- 1924: 貉の食性 1-4 東京日日新聞 大正13年11月10日—13日
- 1925: 世界無比の白蛇の棲息地「山口縣」 萬朝報 大正14年1月15日
- 鶴の渡來地と繁殖地 萬朝報 不詳
- 貉の巢窟 (壹一六) 東京日日新聞 大正14年5月21日—26日
- たぬきのそらねいりについて (壹一七) 東京日日新聞 ,, 9月6日—13日
- 狩獵本能 (壹一九) ,, ,, 10月20日—28日
- 1926: 貉の話 史蹟名勝天然紀念物第1輯第1號 25-34
- 白蛇の話 史蹟名勝天然紀念物第1輯第9號 11-19
- 不詳 「複眼に就て」 (?)
- 「貉の話」(1--5) 東京日日新聞 不詳

## 渡瀬庄三郎博士

佐々木忠次郎

理學博士渡瀬庄三郎君の學歴は汎く世に知られて居るが故に余は喋々之を世に紹介するの必要がない。然し博士の性質に就きては多年余は博士に接したれば多少記憶に止まるものあれば之を紹介することにしよう。博士は世人の知らるる通り溫厚篤實にして學問には極めて熱心の方であつた。而して其研究せられたる論文も頗る多い。博士は専門の學術研究の外時々泰西の小説などを好んで讀まれたやうである。又食慾は頗る旺盛で、美味なものであれば底知らずに食せられても未だ満腹になつたと言はれたことがなかつた。余は濱町の小常磐にて屢々博士と共に食事したことがあつた。同家の主人は料理には頗



渡瀬氏似顔 (佐々木氏畫)

る堪能で得意であつて吾輩の爲めには一層骨を折つて調理をしてくれた。此料理の如きは博士は少しも餘すことなく悉く平げられて尙ほ不足ケましき顔を致されたことを記憶して居る。又博士は鰻鱺が大の好物で、毎週一回位は必ず食せられた様であつた。博士は早く令室を失はれ以來孤獨の生活を営まれたのは御氣の毒の至りであつた。また博士は有福ではなかつたが學術の爲めには少しも惜氣なく其資産を投ぜられた。斯したことは普通人の到底及ぶところではない。益々孤獨の生活や資産の如何に拘はらず終始一貫孜々として學術に貢献せられたるは博士の學術に熱心にして世事に拘泥せられず淡泊にしてしかも磊落なる性質の持主でありしことを證するに足るのである。

## 渡瀬博士と動物畫

### 三 好 學

渡瀬博士が多趣味であり、殊に日本畫を好まれたことを曩に同君の記念として書いた拙文に述べたが、尙聊動物畫に關して同君の所見を自分の知る範圍で述べよう。

渡瀬博士は昔からの動物畫を多く見られたやうである。例へば雪村の虎、狙仙の猿、應舉の猪、狩野家の名手によつて描かれた龍その他の動物畫、又南蘋熊斐などの動物の畫、降つて近世になつては省亭の鳥、曉齋の鳥、金鳳の狸、翠石の虎などの描法に就て批評され、一々その妙所を擧げられた。殊に明治三十年代から日本美術院の諸名家によつて創成された新しい描法の動物畫に就ては大なる趣味を以て覽られたことを記憶する。當時自分は渡瀬君と共に屢々美術院の作品を覽て、同君の畫評を聽いた。

日本畫は勿論流派によつて描法は一様でないが、渡瀬博士の見られた所は徒に動物の形態上でなく、主に生態の點であつた。單に動物の形態を正しく表すのならば普通の寫生畫で十分である。日本畫はさうでなく、精神を貴ぶのであるから畫面にその動物の習性が表れて活動の有様が想像されるやうに描かねばならぬ。渡瀬君は斯様に考へられた。それで形態の表し方に多少の缺點はあつても、動物の習性が能く畫面に出て居れば満足されたのである。實際古來の名畫に能く此點に合つたものがあるが、又往々空想に陥り或は寫生に過ぎて、日本畫の眞髓に遠ざかつたものも少くない。

渡瀬君は特にたぬき(同君は貉の字を用ひられた)の圖畫を集められて、古今の多數の圖に就て此動物の特徴が如何に表されてゐるかを調べられた。これに關しても自分は同君から度々趣味の深い話を聞いたが茲には略する。